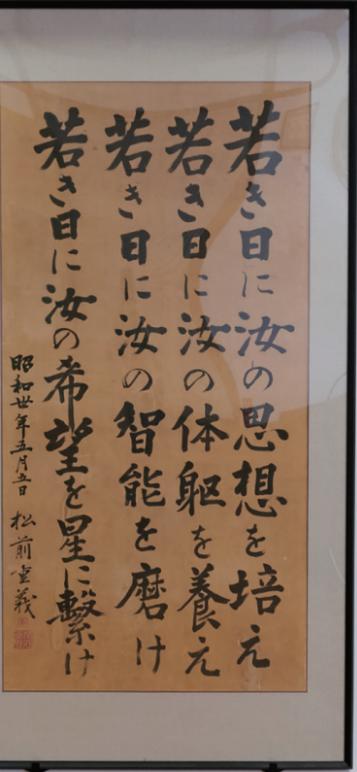
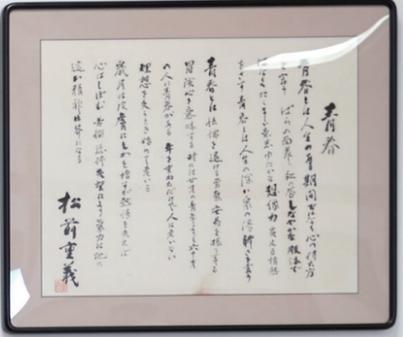


《特集》 平和を願う心

東海大学の源流から世界平和を考える



東海大学の創立者・松前重義博士が教育に託したものが、それは「人類の幸福と平和の現に向かつて、明日の歴史づくりを担う人材の育成」でした。東海大学が建学されて今年で80年。世界では今も、戦争や紛争が絶えることなく続いています。そうした現実を前に、大学は社会に、学生に、何を伝えたいのでしょうか。歴史の波動を大観し、智慧と理性で平和を実現するために、「平和を願う心」を共有した人材、地球市民の育成について考えます。

望星学塾記念館(東京都武蔵野市)。内村鑑三に学び、人生に対する使命感を深く認識して青年教育への志を抱いた松前重義は、1935年に望星学塾の塾舎である浅野博士奨学記念館を建て、教育実践の第一歩を現しました。浅野博士奨学記念館は、現在は望星学塾記念館として保存公開されています。

東京大学教授
吉見俊哉
特別対談
山田清志
東海大学学長

国境を超えてゆく 知のコミュニティとしての 大学教育をめぐる

——先生方はロシアのウクライナ
侵攻をどう受け止められましたか？

吉見教授 まず考えたのは、これは「スパイ」と「俳優」の戦いだと思います。プーチン大統領は、権力を握ってから徹底的に情報を統制してきました。偽情報も流し、人々を操作してきました。これは、元KGBのスパイのふるまいです。彼が囚われているのは、昔ながらのロシア帝国主義の世界観です。他方、ウクライナのゼレンスキー大統領は、情報がネット上で不特定多数に開かれていく世界にいます。アメリカの富豪の支援もあって、ウクライナからの発信は途絶えませんが、今回の軍事侵攻は、善玉と悪玉がはっきりしているのです。脚本はシンプルです。元喜劇役者の彼には演じやすい。これは違う時代、19世紀と21世紀が戦っているようなものです。この位相の差が何を意味するのか、戦争の行方を考える上で、とても重要なことだと思います。

山田学長 ロシアの攻撃は兵器の技術的な向上こそありますが、前の世界大戦と変わりません。短期

的に見れば侵攻を進めているようですが、長期的な視野で見れば、今回の侵攻でロシアに実質的な勝利はないでしょう。吉見 21世紀になって、アメリカ、ロシア、中国の三つの超大国で、民主主義ではなく権威主義が膨張しています。私はトランプ大学で教える盛の頃にハーバード大学で教えるようになりましたが、当時、トランプは絶えず問題を起こし、それで影響力を拡大させていました。攻撃的な身ぶりを受けるのです。今回のロシアの行動は古典的です。戦車を並べ、アメリカが日本や朝鮮半島、ベトナムでやったような無差別空爆をまだやっています。誤爆や巻き添えで亡くなる市民が増えるほど抵抗勢力が増大します。中間的な人々も反ロシアに流れるからです。もう一つ、今回感じたのは、帝国主義のしぶとさです。武力で領土を広げるといって考え方がまだ生きている。山田 21世紀において領土的野心に何の意味があるのでしょうか。科学技術は進歩しても、人類は進化しているのかと疑問です。吉見 今回のウクライナ侵攻は、



吉見俊哉 (よしみ・しゅんや) ㊟

東京大学大学院情報学環・学術情報学府教授。東京大学出版会理事長。東京大学副学長、東京大学総合教育センター長など数々の要職を歴任。東海大学で学部長研修会の講師を務めた。専門は社会学、文化研究、メディア研究。『大学は何処へ 未来への設計』ほか著書多数。

山田清志 (やまだ・きよし) ㊟

東海大学学長。ハワイ東海インターナショナルカレッジ学長など大学の国際部門で数々の要職を歴任。2009年から東海大学副学長、14年から学校法人東海大学常務理事、同年10月から現職。専門は経済法、消費者法。



旅することで知見を広げていく。大学は本来、国境を超えるべく運命づけられています

(吉見教授)

日本の満州侵攻に似ていると言う人が多い。1930年代、日本は世界から孤立しても、戦争への道突き進みました。当時の日本人の大多数は、あの侵攻に異を唱えませんでした。今のロシア人と同じです。外側から、自分の位置を見直す機会を失っていました。今回、ロシアにはもつとよい選択肢があったはずですが、戦争は、ロシアの未来を暗くしています。

山田 外から理性的に自分の国を見る事ができたら、自国の選択の危うさに気がつきます。次に、選択の危うさをどのように回避して戦争を防ぐのか。覇権主義の為政者が現れたとき、その強烈な個性に影響を受けることなく対峙しなければなりません。それができる人々を育む。大学にはそのための手段、大切な役割があります。

パンデミックは対で起こっています。発生の前後は異なりますが、第一次世界大戦とインフルエンザの大流行、スペインやポルトガルの新大陸征服と天然痘による大量死、モンゴル帝国のユーラシア制覇とペストの大流行、天然痘の最初の大流行は、ローマ帝国の巨大化の後に起こりました。

感染症は、その時々の世界で、対話や交易がグローバルに活発化するときに大流行し、世界を分断します。感染予防で接触や対話、交易が止まってしまふ。そして、遮断によって妄想が膨らみ、今回で言えばプーチン大統領の妄想が現実の行動になった。遮断された世界では経済も停滞しますが、大学の学びも死にます。大学は講義がすべてではありません。講義の情報伝達ならオンライン



特別対談

ベリアと、異なる歴史を内包しています。スターリニズム的なソ連に収斂しない歴史を掘り起こせば、単数形ではない、複数形のロシアが見えてくるでしょう。日本や中国にも、これは当てはまることです。京と東国、瀬戸内、日本海、沖縄、北方の歴史は違います。

その歴史の複数形を学ぶことも大学でやるべきことで、それを海外の人々と対話し、共有することも、本来、リベラルアーツ教育の使命です。リベラルアーツは国境を超えるというか、国家に隷属しない個人を育てる教育です。

山田 私は、今回のウクライナ侵攻からクラウゼヴィッツの戦争論を思い起こしました。政治的問題の解決手段として戦争がある、軍備競争をする。そういう論理はきわめて危険です。そういう思考をを持たない個人を、リベラルアーツ教育は育むことができます。教育には即効性はありませんが、漢方薬や感染防止の抵抗力のようなものと考えてもいいでしょう。ところで吉見先生は新型コロナウイルス感染症による、大学教育への影響をどのようにお考えですか。

インだけでも可能ですが、それは大学は成立しない。いろいろな学生がキャンパスに集まって、出会い、異なる体験をすることが学びの基本です。だから、教師にも学生にもキャンパスは必要です。

山田 そこで出てくるのが、反グローバル主義にどう応えるかという課題です。グローバルゼーションには格差を生む要素があります。そこに戦争や感染症が付け入ってくる。大学はグローバル化された環境で輝きを増しますが、その輝きが生む影の部分があるのです。**吉見** 反グローバル主義は見かけ上、アメリカ中心のグローバルリズムに対抗します。大学でも、今は英米中心のピラミッドが強化されています。大学の世界ランキングが実例です。しかし、そもそも大学は、多文化的で多元的な価値を

Special Feature 平和を願う心

持ち、異なる目線から物事を見る可能性を育てるから創造性があるわけです。それがアメリカ中心のグローバルリズムに統合されていくと、創造性は失われます。

山田 ロシアはフラストレーションを感じている。真の地球市民を育むグローバルゼーションとは違うぞ、という言い分があるのです。**吉見** 冷戦の一翼を担っていたという誇りが暴力的な行動を生んだ。それで自滅していく。残念なことです。今、私たちが考えるべきことは、プーチン後のロシアとどう付き合うかでしょう。いつになるかは分かりませんが、プーチン後は必ず来ます。今こそ日本の大学生はロシア語を勉強すべきです。ロシアを嫌いになって勉強しないという考えは逆です。むしろ一つの時代の終わりが見えてきたからこそ、ユーラシア全体を見据えた学びが重要になってきます。

山田 国際政治のリアリストの中には、プーチン大統領の失脚でロシアがいつそう混乱すると指摘する人もいますが、社会が望めば改革を実現する人材は必ず出てきます。そのための人材づくりをする

吉見 ユニバーシティ、つまり大学はそもそも12、13世紀、旅する教師と学生が、旅先の都市で学びの協同組合として作ったものです。境界を超えて旅することで知見を広げ、地元の政治権力と対抗する。大学は本来、国境を超えるべく運命づけられています。

全国にキャンパスがある東海大学ですから、山田先生は旅する学長ですね(笑)。学生も、今日は札幌、明日は湘南、熊本と旅して学べる環境があってもいいかもしれません。さらにハワイからアメリカの諸都市へ旅していくことだってできる。旅して学ぶと、それぞれの地域に興味を持ち、歴史を学び、経済を学びます。それをつなげれば、新しい産業が生まれるかもしれない。いろいろな人材が出てきます。大学の可能性ですね。

山田 そういう人の交流を新型コロナウイルスが止めてしまいました。袋小路に入って、今回の戦争が起こった側面もあるように思います。**吉見** 同感です。乱暴な言い方をすれば、コロナも戦争も反大学的です。人の流れを遮断する。興味深いことに歴史上、戦争と感染症

ことが大学の役割です。**吉見** まったくです。プーチン政権が崩れた時に未来への可能性が生まれてきます。ロシアのいろいろな側面、地域を複数形で見られるようになってくれば、日口関係のネットワークも広がる。国のアイデンティティを単純に一つに収斂させてはいけません。

山田 ウクライナへの侵攻が始まったとき、私は大学のホームページに侵攻を非難する声明を出すとともに、交流のあるロシアの大学学長宛に交流の継続と憂慮の念を伝える親書を送りました。何があっても交流のチャンネルだけは途絶えさせてはいけません。これまで重ねてきたロシアの人々と地道な交流を遮断してはならない。為政者が強制した国家間の分断を回復するために、学術文化、スポーツでの交流を保ち続けます。

フランスの思想家ジャック・アタリ氏が、人類の歴史上、民主主義国間では戦争は起きていないと指摘して、民主主義の重要性を唱えています。学生たちに民主主義の大切さを、気持ちを込めて伝えて行きたいですね。

社会が望めば改革を実現する人材は出てきます。そのための人づくりが大学の役割です

(山田学長)